



2014. 9. 01

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

## 継続は力なり

### ～中高生と向き合って～

出前講座チーム 乳井 京子

#### ■なぜ「出前講座」？

地球の木は、設立から23年、カンボジア・ラオス・ネパール・フィリピンなどで困難な状況にある人々の自立を助ける活動をしてきました。貧しい家庭の少女が支援を通して力を付け、先生になった。村人たちが力を合わせて森を守るようになった。織の技術を磨いてきれいなショールを織ることができるようになった。支援地では数々の成果が生まれています。

しかし、世界中で起こっている貧困、環境破壊、人権侵害などの問題は、支援だけでは解決しません。日本に住む私たちが、同じ地球に住む市民として繋がりながらこれらの問題と向き合い、私たちの喜しのあり方を見つめ直していくこと。これも私たちにできる国際協力と考え、地球の木は『地球市民活動』に取り組んできました。今号では、『地球市民活動』の一つ、出前講座についてご紹介します。

#### ■16年の軌跡

5月の連休明け、横浜市南区にある平楽中学校の「国際学習」に講師として招かれた時、「国際学習」が今年で16年目になると聞いて驚きました。地球の木は、この取り組みに初期から関わっていたのです。講師派遣に加え、先生方が自力で「マジカルバナナ」「貿易ゲーム」などのワークショップをできるようにと教師研修にも協力していました。今では、1年生の「マジカルバナナ」、2年生の「貿易ゲーム」が国際学習の定番となっています。

地球の木は「世界がもし100人の村だったら」「ラオスの森～村のくらし」「ネパールわくわくワークショップ」など毎年、平楽中でワークショップをしてきましたが、16年の間には、忘れがたい出来事もありました。国際学習の総仕上げである校内スピーチコンテストで優勝した生徒が、横浜市のスピーチコンテストで市長賞を取り、ニューヨー

## CONTENTS

- 継続は力なり～中高生と向き合って～ ……1～2
- マンガルトール村教育事情 ……3
- 楽しんで学ぶ ……4
- カンボジアの新プログラム ……5
- カンボジア・アン村ですすめる自然染色 ……5
- 学習会 インドシナ半島の歴史 ……6
- グローバルeye 集団的自衛権の行使はNGOにとってよいこと？ ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8



10年ほど前「ネパールわくわくワークショップ」をする筆者

クの国連本部に「平和のメッセンジャー」として派遣されたのです。

毎年平楽中から送られてくる生徒たちの感想を読むと、可哀そうだから募金をしよう、に終わることなく、自分たちの喜しを見直すという視点や世界平和のために自分は何ができるかという問いかけが随所に見られます。継続は力であるとつくづく実感します。

#### ■支援の中から生まれたワークショップ

もう一つ、毎年紫陽花の咲く頃に行われる、鎌倉女学院の「国際セミナー」があります。高校1年生を対象とした行事で、こちら今年で14年目。地球の木は、毎年「ネパール・タルー族の家族ゲーム」というワークショップを行っています。極西部で行っていた識字教育支援の経験から作ったオリジナル・ワークショップです。

4つの家族にグループ分けし、お父さん役はひげとトピー（帽子）、お母さん役はビーズのネックレスを付けてもらい、字の読めない体験や、計算ができなくて油売りに騙される体験をします。すんなり騙されてくれる、素直な生徒たちばかりの年もあれば、なかなか手ごわく、油売りがアブラ汗をかく年もありますが、ゲームの後、話し合い、その内容をまとめて発表する生徒たちの力にいつも圧倒されます。卒業5年目に実施するアンケート調査には、「国際セミナーがとても印象深かった」という感想が多く、国際関係に進む卒業生も出てきているそうです。

若者たちの真摯な眼差しに、日本の明るい未来を見る。これぞワークショップの醍醐味です。

# 今年のワークショップに参加した生徒たちの感想から

## 平楽中学校1年生「世界がもし100人の村だったら」

世界の人口を100人に縮めた、このワークショップでは、世界の人口の分布、言語、文字が読めないことの不便さ、貧富の格差をゲームで学びます。ビスケットの分配で不公平さを疑似体験し、自分たちに何ができるのかを考えます。

■印象に残ったのは、ビスケットを通しての豊かな人とそうでない人を学習したことです。最初はマジでいかり狂ったように「ふざけんな」という言葉が出ました。けれども、あれが現実で、自分のぜいたくが貧困な人から言うと「夢」のような話だから、ぜいたくをあげたいと思いました。(SFくん)

■世界の国々、ネパール・ラオス・カンボジアの事を教えてもらってありがとうございました。ぼくは、知ってビックリする事がありました。それは、うちゅうから見たときの地球です。なぜかという、アジアらへんは光っているのに、アフリからへんは、一つも光ってなかったのが、おどろきました。(SRくん)

■自分も貧しい国の人たちのために、食べ物を大切にしたり、水を大切にしたいと思いました。(NRさん)

■「100人村」をよんで、泣きそうになりました。また来てください!!(KKさん)

村に住む人びとの100人のうち、20人は栄養がじゅうぶんでなく、1人は死にそうなほどです。でも15人は太りすぎです。

すべての富のうち、6人が59%をもってみんなアメリカ合衆国の人です。

74人が39%を、20人がたったの2%を分けあっています。

すべてのエネルギーのうち20人が80%を使い、80人が20%を分けあっています。



■印象的だったのは<sup>\*</sup>デブラニ物語です。このことで勉強の大切さをさらに実感する事ができました。(SKくん)

■担任の先生から  
ワークショップを通して世界の格差について考えさせられました。「デブラニ物語」のお話から、かつて日本にもあった女性問題について思い出しました。世界中の人々が協力し、格差をなくすために働きかけることが大切だと感じました。

\*: 地球の木オリジナル紙芝居。主人公のデブラニは、支援の中で成長し、先生になった実在の人物。

## 鎌倉女学院高校1年生「ネパール・タルー族の家族ゲーム～識字がもたらすもの」



■デブラニの識字教室が、デブラニから生徒へ、生徒からまたその生徒へと継承されていくことに感動しました。この活動を続けていけば、字が読めるようになる人が増えて国も豊かになると思います。この話を聞いて、発展途上国の支援は、金銭的な支援だけでなく、生活する手段や知恵を教えるべきだと思いました。援助で生活するのではなく、自分たち自身で生活していくということが大切だと思ったからです。(MYさん)

■途上国の人たちは、ただお金だけを支援されても嬉しくないのではないかと思います。最終的には、お互いに助け合えるようになるのが理想的だと思います。

(YTさん)

■私は字が読めるので、あまり感じたことはなかったけれど、字が読めないだけでだまされてしまって、どんどん生活が苦しくなり、もっと学校へ行けなくなるというのを身近に感じました。字が読めるだけで安心感があ

たし、出来る仕事も増えていくと思います。読めるということだけで、いろいろな可能性が出てくると思うので、字が読めることは幸せだなと感じました。(YMさん)

■先生の感想

生徒の様子を見ながらよくご指導いただき感謝しています。ありがとうございました。途上国の現状や援助のあり方について知り、考え、生徒それぞれのレベルで感じるところがあり、何かしら内面の変化があったことと思います。

普段意識することのない「字が読めない」ことによる不便、不利益をゲームを通し体験することができ、子どもたちにとっても大きな気づきになったことと思います。初めて知る事実で驚いた子どもたち、これから行動へと移せるようサポートしていければと思います。



出前講座の詳細は



## マンガルトール村教育事情

若い先生を指導するサルバジットさん

少数民族が多く住むマンガルトール村とその周辺で、村人たちと共に作るプログラム「幸せ分ち合いムーブメント」を実施して7年目となりました。教育、生活改善、ムーブメント推進の3つの分野のうち、今回は教育に焦点を当てて報告します。

### 学校教育は60年前から

ネパールでは、1846年から1951年まで、ラナ将軍家による専制政治が行われていました。この間、ラナ家は教育が権力を脅かすものとして力を注がず、ほとんどの国民が教育から除外され、識字率が2%以下という時代がありました。ラナ政権が崩壊した後、教育省が設置され、政府や地域の活動家などにより全国各地で爆発的に学校が建設されました。

マンガルトール村にある学校も1960年代に地域の人たちが教師を町から呼んできて始まり、謝礼はトウモロコシだったという話を聞いています。

### ネパールの教育制度は？

2009年に制定された新教育制度では、1～8年生が基礎教育、9～12年生が中等教育、その後の大学が高等教育となりました。10年生が終了するとSLCと呼ばれる全国統一試験が行われます。「鉄の門」と言われるほどの難関です。この試験は大学進学時にコースを決定する時や企業への就職の時に必要になります。合格結果には、私立と公立の差、都市と農村の差が歴然としています。残念ながらマンガルトールの高校のSLCの結果は悪く、改善に向けた取り組みが必要です。

現地コーディネーターで教育の専門家であるサルバジットさんによると、「ネパールの教育制度には依然として格差があり、カースト、ジェンダー、宗教、地理的条件などが考慮されていない。地理的にも民族的にも多様なネパールのような国にはふさわしくない制度であり、新しい教科書でさえ、全国の学校に届けられていない状況である」とのことです。

### 実施しているプログラム

「幸せ分ち合いムーブメント」では、毎年16人の奨学生が選ばれています。選考基準は、少数民族、女性、家庭の経済状況であり、成績ではないことが特徴です。この他、格差を縮めるための様々な教育関連プログラムを実施しています。

#### ・教師トレーニング

2日間行われ、周辺の16校から教員22名と奨学生4名などが参加しました。

今回の講師はSAGUN理事であり、社会参加の専門家

マハンタ・バブ・マハルジャン氏。テーマは「よりよい教育のために親ができること」。今回参加した奨学生たちは、政府主催の識字教室の講師として成人に教え始めたばかりです。識字教室の講師として経験を積み、小学校の教員に採用された元奨学生もいます。

#### ・小学校教師サポート

しばらく中止していたプログラムですが、小学校の教師不足解消のため、今回はマンガルトール村の小学校1校とカルパチョーク村の2つの小学校の合わせて3人の教師を支援しました。どの学校も急な山道を登った山の中にあります。地理的条件により、学校の様子もかなり違うことがわかります。

サルバジットさんは各学校を訪問し、授業を観察し、アドバイスを与えました。3人とも新任の教員で、1年生と未就学児のクラスに算数、英語、社会を教えています。

#### ・サルバジットさんの助言

- ・生徒が毎日学校に来るように、魅力的な授業を。
- ・地域のことはあそび、笑い話、歌などを用いる。
- ・ネパール語も英語もなるべくやさしい表現を使う。
- ・教室を歩き回り、子どもたちに身近に接する。
- ・大きな声で教える。
- ・教科書以外に、地域の文化・習慣・天然資源・生産物について教える。
- ・よいマナーを教え、健康や衛生面についての意識も高める。
- ・板書する時は大きな字で、子どもの背丈を考慮する。

3人の教師たちは、4ヵ月後再訪するまでに、子どもたちの学習態度を向上させ、教育レベルをあげることを約束しました。

この他、高校生の作文コンテストやカトマンズの博物館や中央図書館への校外研修などのプログラムを行っています。  
(ネパールチーム 丸谷 土都子)



赤ちゃんを抱きながら教える先生

## 楽しんで学ぶ

### 学生たちが演劇や人形劇を上演

雨の多い6月。それは、ラオスの食を代表する林産物の一つ、タケノコの収穫の時期である。また少し涼しくなる一方、蚊が増え、デング熱やマラリアにかかる危険があるのもこの時期だ。農村部では、田植えが始まる季節。村人は毎日稲作に忙しくしている。家の農業の手伝いができるよう、子どもたちが通う学校もちょうどこの6月から夏期休暇に入る。そして、JVCにもこの時期にしかできない活動がある。それが演劇・人形劇をもちいた、土地問題や自然資源の大切さを教える意識啓発活動だ。活動対象郡ピン郡にある少数民族学校の生徒が役者となり協働するため、彼らの休暇期間を使って行うからである。



電気がない村での上演は、一大イベント！

JVCの対象村では、多くの村人が土地や自然資源の所有に係る問題を抱えている。十分な情報もないまま契約栽培に手を出し多額の負債を抱えてしまう例や、不利な条件で土地売買の契約をしてしまう問題などである。これらの問題の根底にあるものは、「村人が正しい情報と理解を得る機会がない」ということであり、この演劇・人形劇の活動は、土地や自然資源の大切さや問題を村人たちに認識・理解してもらう手助けをする。地元の生徒がブルー語で上演するため、ラオス語を解さない女性も子どもも鑑賞でき、学ぶことができるというのが、この活動の頼もしいところだ。

役者には選ばれた生徒たちは12名。昨年度から発声練習や、台本理解など、時間をかけて取り組んできた。6月に5日間の短期の集中練習合宿を行い、本番に臨んだ。初めての村での実演に生徒たちは緊張し、セリフを忘れてしまったり、ブルー語とラオス語の使用を混同してしまったりといったハプニングも見られたが、予定どおり5村での実演を終えた。どこでも大盛況で、毎日50～100人の村人が楽しんだ。女性はクスクスと笑い、子どもたちはキャッキヤと言い、娯楽がない村でのこのようなイベントは実施する私たちも心が踊る。村人からは「村でも（上演のストーリー）同じようなことが起きており、注意する必要がある」「村の皆で相談し、土地や資源を守っていかねばいけぬ」「楽しかった。またやってほしい」などの感想が聞かれた。



担当スタッフ ホンケオが村人たちを楽しませながら進行する

演劇を行った生徒たちについても、こうして自分たちで村の問題について考え、それを改善しようと行動する経験は貴重なものとなった。担当スタッフのホンケオは「この活動をとらえて生徒たちに責任感が芽生えているのを見てとれ、何より嬉しい」と語った。

私自身も「楽しく学ぶ」ということが理解につながり、村人たちの自主性を引き出すことを、改めて実感した。  
(JVCラオス現地事務所代表 林 真理子)

### 【役者さんをしてみてどうでしたか？】

演劇に参加でき、  
たくさんの人に見てもらえて  
とてもうれしかったです。  
この活動に参加できて良かった点は、森林や野生動物を保全することを学んだことです。難しかったのは、役者が色々言いたくなくても、台本に従わないといけないところでした。



シースワン君  
(ピン郡民族学校生徒 17歳)

## カンボジアの新プログラム

7月末にカンボジアを訪問しCWCC (Cambodia Women's Crisis Center)へ初めての支援金を渡してきました。日本からの支援金は初めてで、とても喜んでいただけました。

今回お会いしたのはプログラム・マネージャーのソジェットさん。CWCCの中ではディレクターの次に大きな責任を背負う彼女はまだ30歳ということでした。タイの大学院でジェンダー・スタディ（主に女性の地位向上を目指す学問）を研究し、タイのNGOを経て2011年にカンボジアに帰国。そしてこのポジションに就いたそうです。

「この団体で一番大変なことはなに？」と聞くと「バランス」と言う。「『犯罪防止』『被害者の救済』『権利の提唱』このすべてをバランスよく行わないと解決が遠のく気がする」と少しストレスを抱えた感じで答えてくれました。「カンボジアは政府がしっかりしていないから、私たちが頑張らないといけない。そのために海外の資金を使うことに少し後ろめたさを感じる」とも。

しかし彼女がカンボジアの未来に対してしっかりとしたビジョンを持っている事が印象的だった。「カンボジアの高校生ボランティアと一緒に人身売買反対キャンペーンを企画しています」「シエムリアップで今年からペアレンティング(育児)ワークショップを始めました。残念なことにカンボジアでは親がどのように子どもと接していいのかわからない家族が多いのです。子どもは働けるようになったら働く、小さな大人とすぐに考える人も少なくありません。そういった家族へのアドバイスなどを行っています」。



ソジェットさん

カンボジアの高校生が活動に関わっている事やカンボジアの家族が少しずつ変わっていくことを嬉しそうに報告するソジェットさんを見て、是非この団体を見守っていきたく、よりいっそう強く感じました。  
(理事 古田 麻利子)

## カンボジア・アン村ですすめる自然染色

クメールシルクプログラムでは、タケオ州アン村で自然染色による紺シルクスカーフの開発に力を入れてきました。生産者を支えると同時に昔ながらの伝統を取り入れながら、環境にやさしい自然染色を復活し、そのよさを日本に、そして地元にも伝えていこうというプログラムです。

自然染色のスカーフはこの数年、生活クラブ・福祉クラブにも協力をいただき販売をしていますが大変好評を得ています。手紡ぎ糸を使い、カンボジアの伝統的な柄をアレンジしたもので、染色はラックカイガラムシなど自然のものを使ってきました。

6月下旬アン村を訪れました。この村を訪れるようになって3年になります。好評のラック染め紺スカーフですが、来春に向けて、さらに自然染色の色数を増やした「アン村ナチュラルカラーコレクション」の企画準備のためです。今回は黄色のバリエーションを自然染色で作ってみようと思っていました。伝統的に黄色は、プロフーという名前の木から採られていましたが、数年前、政府が伐採を禁じたそうで、それに代わる黄色が自然のもので出せないかと考えていたところ、思いついたのが蓮の葉です。今までカンボジアに行くたびにあちこちの池にたくさん蓮があるのを見かけるので、あれを染められないかとつねづね思っていたからです。

ずっとボランティアで地球の木の連絡係や通訳をしてくれているチャンディナーさんとアン村に着くと、ヌーンさんの家に行きました。この紺スカーフを継続的に織ってくれているヌーンさんには重い障害のある孫がいて、去年からはご主人も病気がちです。

さっそく蓮の葉を採取に、3人で、お寺の池に向かいました。蓮は池の一面にあり、岸から手をのばしてかんたんに集めることができました。

ヌーンさんの家にもどり、染めのテストにとりかかりました。鍋に湯を沸かし、蓮の葉をハサミで刻んで20分ほど煮て染め液をつくり、いよいよ絹糸を染めると……。強い生き生きとした黄色に染まりました！

染めをしていると近所の人たちがのそきに来たりして、「プロフーの色とはちょっと違うけれど、これはいいぞ！」とか「村中のひとがお寺の池の

蓮の葉をとったら、お坊さんが怒るかも〜」とかワイワイ言っています。ヌーンさんの家の軒先に染めあがった糸のカセ(束)を干していると、ヌーンさんのお母さんが手に取って「わたしはこの色が好きよ」とにっこりして言ってくれました。



染めあがった絹糸

今までに作り貯めた染めのサンプル糸も参考にし、「ナチュラルカラーコレクション」はココナツの皮で染めたやさしいピンクベージュを経糸(たていと)に、緯糸(よこいと)はピンク(ラックカイガラムシ)のほか、オレンジ(カレーに入れる香辛料)、黄色(蓮の葉)、緑色(冬瓜の葉とバナナの葉)の4色展開を考えています。今後をどうぞご期待ください。

今回は通訳のチャンディナーさんのお宅に宿泊させていただきました。お母さんは忙しいので調理はお父さんが担当。とても美味しくおしゃれなお料理をいただきました。いつのまにか隣のおばさんがやってきて、傍に座り、いろいろ質問責めに。「日本でも、どの家でも牛を飼ってるのかい？」と聞かれるので、「いえ私はアパート住まいだから残念だけれど牛は飼えないの」と答えると「あらま、それじゃあブノンペンみたいだねえ」と言われました。

チャンディナーさんのお宅にも雨水を貯める大きな水壺がありますが、料理など飲食には水壺の水を、お風呂などには井戸の水をを使い分けているそうです。

井戸水の汚染と化学染料の廃液との因果関係ははっきりと調べたわけではありませんが、ドイツ製で安全といわれるアソフリーの化学染料はかなり高額なので、現地では安価なベトナム製やタイ製の染料がまわっています。しかしそれらは環境への影響が心配です。その染料が井戸水を汚染し続けているとしたら、その生産は持続可能とはいえないでしょう。

アン村での化学染料を使わない自然染色は小さな取り組みですが、波紋のようにこの織物村に広がる日がくることを願っています。

(クメールシルクチーム 大藪 明恵)



蓮池の前でヌーンさんと筆者



## インドシナ半島の歴史



7月12日、「歴史を振り返り、現在起きている問題を理解するヒントにしたい」とインドシナ半島の歴史を学ぶ学習会が開催された。講師は、元日本国際ボランティアセンター（JVC）の島村昌浩さん。民族や国々が複雑に絡み合ったインドシナの歴史はとても難解であるが、十数名の参加者が島村さんの丁寧な話に聞き入った。以下、短くまとめた歴史と、参加者との質疑応答です。

### 歴史

カンボジアのあるインドシナ半島南部は、有史以前から人々が生活しており1世紀ごろ「扶南（ブナム）」という国が建国された。以後いくつかの国が盛衰を繰り返した。802年にクメール王国のアンコール王朝が始まり、12世紀には最盛期を迎える。しかし1431年にシャムに敗れて以来、度重なる周辺国との戦いで国は衰微していった。

一方、ベトナム北部地域は、紀元前からおよそ1千年の間中国により支配されてきた。キン族（ベトナム人）国家の成立は、11世紀を待たねばならない。キン族はハノイを都に李朝ベトナムを成立させる。その後、群雄割拠状態や内戦状態を経て、19世紀に入ると阮（グエン）朝が現在のベトナム全土を支配下に置くようになった。

現在のラオスを形成する中心民族は10世紀に中国から南下を始めたラオ族である。13世紀に入り王国が建国されるが、王国は次々に争いや分裂を繰り返し19世紀初めには滅亡してしまう。

19世紀のインドシナ半島では、シャム（現在のタイ）とベトナムの2大勢力が、この地域での覇権を争っていた。ラオスもカンボジアもその間に挟まれ、領土をそれぞれ侵食されている状態であった。この時期フランスは、アジア貿易の拠点としてインドシナ半島に求め、1862年にベトナムのサイゴン（現在のホーチミン）を陥落し、植民地とした。その後カンボジアとラオスも植民地化されたが、フランスは、国土の大部分が農村であるこの二国に関しては、ベトナムという植民地運営の副次的なものしか見ていなかった。



インドシナの歴史に造詣の深い島村さんと熱心に聞き入る参加者

1940年日本がインドシナ半島へ勢力を伸ばし、フランスとの共同統治という形で、この地における影響力を強めた。しかし戦況が不利になり1945年3月にはカンボジアとラオスをフランスから独立させたが、8月の日本の降伏により再びフランスの支配下に入ることになった。両国の独立はわずか5ヵ月に過ぎなかったが、この短い独立がそれぞれの国民の民族意識を促し、その後の独立運動へと繋がることとなった。

1953年、ラオスとカンボジアはフランスからの完全独立を勝ち取ったが、ベトナムのフランスからの独立戦争、さらにそれに続くベトナム戦争に巻き込まれ、厳しく激しい内戦が続くこととなった。1990年まで東西冷戦の最前線に立たされ、試練を受け続けてきたのである。周辺諸国が着実に経済的な基盤を整えてゆく中、足踏みを余儀なくされ、周辺諸国からとり残されてしまったラオスやカンボジア。そしてそれらの戦争による政治、経済の混乱で大量のインドシナ難民が生み出されたことは私たちもよく知るところである。

### 質疑応答

Q：インドシナ半島の国々には私たちが想像もできないような戦いがいろいろとあったが、これからもこのようなことがあるのだろうか？

A：すぐには無いだろうが、長い海岸線を持つベトナムは、その地の利のため争いに巻き込まれてきた。もしあるとすれば、中国と領有権を争っている南沙諸島によるものだろう。

Q：6、7年前、地球の木がカンボジアでチャイルドケアセンターの支援をしていた時、「模範になる大人が少ない」と言われていたが、今はその問題は解決されているか？

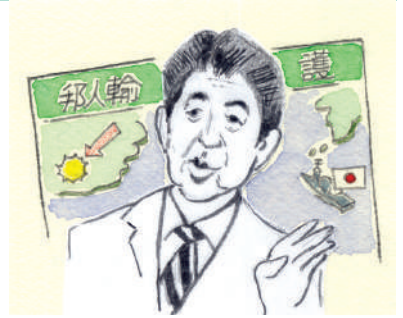
A：ポルポト政権時代、すべての人民を平等にという理念のもと、底辺の農民に合わせて、高等教育を受けた人や、技術を持った人を、格差を生み出す元凶だとして抹殺した結果が人材不足の原因だっただろう。しかし徐々に海外留学する人も増え、教育も進み、子どもたちの模範になる人も増えている。

Q：ラオスがこれから改革などで変わっていくことはあるか？

A：多くの方は日々の暮らしにいっぱい、あまり将来のことを考える余裕はない。ほとんどが貧しいラオスでは、人々の間に不満は少ない。しかし外から一気に資本が入ってくると貧富の差が拡がり、争いが増えていくことになるかもしれない。

（会報作成チーム 沼田由美子・浜辺美英子）

## 集団的自衛権の行使は NGOにとってよいこと？



7月1日、安倍内閣は集団的自衛権を含む自衛隊の海外での武力行使を容認するとの閣議決定をおこないました。これに先立つ5月15日の記者会見で安倍首相は、危険にさらされたNGO職員が描かれた絵をパネルで示し、「(海外で働く)NGOの若い人たちが危険な目にあっている中において、自衛隊が彼らを守ることができなくていいのか」と述べました。一見「それは大変、そのとおりだ」と思わせる内容ですが、実際はどうなのでしょう。これは、海外でNGOが襲撃された場合、国連平和維持活動(PKO)中の自衛隊が救援に駆け付けた時に武器使用が可能になるといいういわゆる「駆け付け警護」の具体的な一例として出されたものです。その警護される側のNGOとして、6月10日、地球の木がラオスでのプログラムや緊急救援等で支援をしている日本国際ボランティアセンター(JVC)が提言を出しました。その提言では、アフガニスタンやスーダンなど紛争地での支援活動の経験を踏まえ、「NGOを守る」ことを理由に海外での武力行使を正当化することに異議を唱え、武力行使によって平和国家としての日本が「失うもの」の大きさを冷静に考慮した議論を求めています。

JVCの長谷部事務局長(元アフガニスタン担当)は「確かにアフガニスタンでの活動は危険と隣り合わせだが、いざというとき、自衛隊が駆け付けて解決してくれるなんて現実的ではない」と話しています。多くのNGOは徹底した安全対策に基づいて行動していて、その基本は治安情報の収集・分析、そして目立たないように行動すること。国連

や国際機関、他のNGOと共に、退避計画なども作り慎重に行動している。それでも万が一、戦闘や誘拐などに巻き込まれた場合、必要なのは「警護」ではなく、「救援」で、多くの場合地元の信頼される有力者や国際赤十字委員会など中立性の高い国際機関などの仲介で解決を目指すことが特に重要だそうです。何より、日本がこれまで「非軍事」に徹した国際平和協力活動で獲得してきた「平和国家」としての国際的な信頼を失うことにもなり、これはNGOの活動環境を一変させる危険もあるということです。

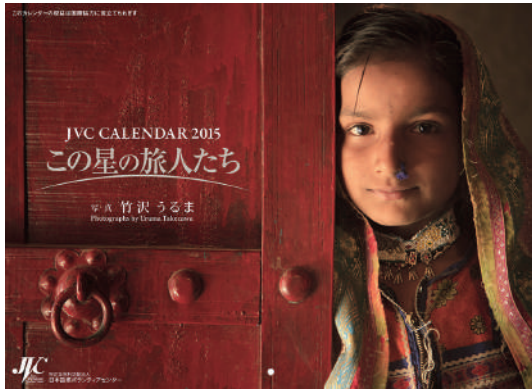
集団的自衛権の行使を認めたこの閣議決定については、世論を二分するほどの議論となっていますが、「ていねいな説明が必要」という政府に対して、説明されればされるほど、状況を理解し、不安になる若者、女性などからの慎重な審議を求める声が強くなってきているようです。首相自身による「わかりやすい」説明で、多くの国民があまり考えることなく、雰囲気だけでやり過ごしてしまうことの怖さを感じます。実質的な集団的自衛権の行使に必要な法として自衛隊法やPKO法案など関連法の改正案は、来春の通常国会にて一括で提出されることになっていて、これから秋の臨時国会などでもこの議論は続いていくでしょう。地球の木では、JVCや国際協力NGOセンター(JANIC)などがおこなっている提言や声明に賛同・協力し、「机上の空論」ではない、「現場からの声」をこれからも皆さまに伝えていきたいと思っています。

(事務局長 筒井 由起子)

\* 詳しくは、日本国際ボランティアセンター(JVC)のホームページで「集団的自衛権をめぐる論議に対する国際協力NGO・JVCからの提言」をご覧ください。 <http://www.ngojvc.net/jp/projects/advocacystatement/>

### 活動日誌(6月~8月抜粋)

- |        |       |                                            |
|--------|-------|--------------------------------------------|
| 6月     | 8~10日 | 第19回ふれあい交流の広場参加<br>(かながわ県民センター)            |
| 2日     | 11日   | アーシアンカフェに講師として参加(千葉)                       |
| 6・7日   | 12日   | インドシナ半島学習会(中区民活動支援センター)                    |
| 13日    | 22日   | 海外事業ミーティング                                 |
| 14日    | 25日   | ボランティアDAY                                  |
| 16日    | 26日   | かながわ共に生きる学習会 映画「まとう」を見てみんなで話し合おう(横浜中央YMCA) |
| 19~27日 | 8月    |                                            |
| 25・26日 | 2日    | 国際交流イベント参加(平塚商業高校)                         |
| 27日    | 17日   | ジギャンさんとロシ・ラハールを読む会<br>(アジアンパーティ)           |
| 7月     | 29日   | 第2回理事会                                     |
| 2日     |       |                                            |
| 3日     |       |                                            |
| 5日     |       |                                            |
| 8・9日   |       |                                            |



## 地球の木カレンダー2015 「この星の旅人たち」

写真：竹沢うるま  
サイズ：32×38.5（使用時60×38.5cm）  
制作元：日本国際ボランティアセンター  
価格：1,600円

お友達やお世話になった方へのプレゼントにもいかがですか。メッセージカードを付けて地球の木よりお届けします。

### 第10回ひらつか市民活動センターまつり

日時：9月28日(日) 10:00~15:30  
場所：ひらつか市民活動センター  
(JR平塚駅南口徒歩2分)

地域で活動している団体の活動紹介やパフォーマンス、バザーや模擬店など盛りだくさんです。地球の木は、フェアトレードのクラフト販売で参加します。

### 元町トミーでフェアトレード品販売

日時：10月1日(水)~12月30日(火)  
場所：元町トミー(ユニオン前)  
(JR石川町駅元町口徒歩3分)

期間限定のフェアトレードショップです。お手伝いしていただける方を大募集しています。

### グローバルフェスタJAPAN2014

日時：10月4日(土)・5日(日) 10:00~17:00  
場所：日比谷公園(東京都千代田区)  
(地下鉄霞ヶ関駅「B2」徒歩3分、日比谷駅「A4」徒歩2分)

今年も国際協力活動を行う政府機関、NGO、企業など一同に会する国内最大の国際協力イベントです。毎年大人気の子手ミ販売とクラフト販売で参加します。イベントを楽しみながらのお手伝い大募集です。

### かまくら国際交流フェスティバル

日時：10月13日(月・祝) 10:00~15:00  
場所：鎌倉 高德院(鎌倉大仏)  
(江ノ島電鉄長谷駅徒歩7分)

あたたかいラオスコffeeと地球の木カレンダー、フェアトレードクラフトを販売いたします。

### よこはま国際フェスタ2014

日時：10月18日(土)・19日(日) 10:30~16:00  
場所：象の鼻パーク  
(みなとみらい線日本大通り出口「1」徒歩4分)

国際協力などの100余りの団体が参加します。海の前の会場は横浜ならではのにぎわいがあります。地球の木のブースへ是非いらしてください。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市個人住民税からも控除となります

イベントの秋です。お手伝い大募集！(できる時間だけのことです。地球の木事務局までご連絡ください)

### オルタ館フェスタ

日時：11月15日(土) 10:00~15:30  
場所：オルタ館(新横浜駅下車徒歩7分)

今年もフェスタ名物オルタ鍋があります。地球の木は、フェアトレードのクラフトを販売します。

### ネパール調査報告会

日時：11月22日(土) 11:00~14:00  
場所：レストラン「アジアン・パーティ」  
(JR関内駅より徒歩6分 中華街玄武門入ってすぐ左)  
資料代：500円

現地の最新情報をお伝えします。報告会の後はネパール料理を楽しみましょう。

### 復興支援まつり

日時：11月29日(土) 10:30~14:30  
場所：山下公園  
(みなとみらい線元町・中華街駅出口「4」徒歩3分)

昨年也大盛況だった復興支援まつり。今年も地球の木の支援地「気仙沼」から、昨年大好評のふかひれスープと海産物サンマの薫製を販売します。

### 秋のデポー展示会

お近くのデポーでご来店をお待ちしています。地球の木カレンダー2015も販売しています。

横浜	つつじが丘デポー	9月 9・10日
	高津デポー	10月 9・10日
	みたけ台デポー	10月16・17日
	センター南デポー	11月24・25日
東京	緑園デポー	12月 4・5日
	デポーせたがや	9月12・13日
	デポー石神井	10月25・26日
	デポー町田	11月24・25日

### ボランティア募集!

- ・Webチームでホームページ更新などの手伝い。
  - ・クラフト販売の手伝い。
- 経験のある方、または関心のある方お願いします。